ドストエフスキーを読む会　報告『罪と罰』第9回

報告者　梶原公子さん

今回は『罪と罰』の最終回。報告者は「気になる二人の脇役」としてマルメラードフとルージンを挙げた。それぞれの人物について報告者から質問が投げかけられ、参加者がそれに答える形で進行した。最後はエピローグを踏まえた総括的な話で締めくくられた。私見を交えつつ当日の議論を振り返る。

マルメラードフについて

彼を愛すべき人物とみるか、ただのダメ人間とみるかで意見が分かれる。私は酒飲みに理由など要らないと考えるのだが「飲めばあわれみと同情が見つかるような気がしてそれで飲む」という彼の発言から、彼は彼なりに妻カテリーナの痛みを知ろうとしている、きっとキリストが憐れんでくれるだろうという意見があった。彼は自殺したのだろうか、という問題提起もあったが、そこはどちらとも解釈できることで、アルコールによる緩慢な自殺ともとれるし、生きる意欲を失っていたから事故を回避できなかったという見方もできる。資料のなかに中村健之助『ドストエフスキー人物事典』からの抜粋があり、その記述に対して「上から目線ではないか」など厳しい意見がいくつか出された。この本は確かに便利だが、あまり頼りすぎないほうがいいと思った。

ルージンについて

彼はフェアではない描かれ方、道化として描かれている。「黙っていればいいのに」という意見があったが、それは彼を道化として描くための材料、言質を彼自身が語り手に提供していることを指す。ただしその点を割り引いても、彼を俗物と見ることに異論はないだろう。だから取るに足らない人、ポピュリズムを作る人、パワハラ体質の人、といった意見が出てくる。新自由主義的資本主義者、リバタリアンなどと見る意見もあったが、彼が語る「経済学の真理」は中途半端な知識のひけらかしなので、それは買い被りではないかと思った。ところで俗物とは中立的に言えば現実的、実務的な思考ができる人である。その意味では、ルージンはダメなラズミーヒンであると言える。「だからドゥーニャに振られたのだ。ルージンはこれを機に学習してください。」という痛烈な意見だ。

総括的な話

ドストエフスキーの作品をキリスト教の文脈で捉えるか、それとも世界線の提示として捉えるかはそれぞれの立ち位置で変わってくる。ただし、今回は報告者のアプローチの仕方に合わせて登場人物を中心に考える。エピローグの時点でラスコーリニコフが改心しておらず、非凡人の理論など自らの信念を捨ててないことは今までの議論で一致したところだろう。彼は「彼女（ソーニャ）の信念がおれの信念となってもいいはずだ」と考えるに至った。ダブルスタンダードと言えば悪く聞こえるかもしれないが、それがまともな人間のあり方ではないのか。